

3 2020年度 論文

コミュニケーションする美術で学校が学習協働体になる

36期 文化表現系教育コース(美術)

土野(蜂須賀) 公子(大阪府)

1. はじめに



図1 46期生「絆」の原画

2020年2月28日、新型コロナウイルス感染症予防のための休校が発表された。

翌2月29日、突然の3年生最後の授業となった。

次の文章は、その時の3年生への「3年間の美術の授業を振り返って」というアンケートから抜粋したものである。

「クラスで分担し、全員で協力してできて良かった。」「学年で一つの作品にしたところがすごく楽しかった。」「こんなにも短時間で仕上げられたので、驚きと感動を感じています。」「今まであまり話せなかった人ともたくさん話せて、最後にこのクラスで良かったと思うこ



図2 46期生卒業式前日の舞台

とができました。」ところが、10mの卒業制作「絆」は、3月13日の卒業式を目前にして、5クラスのパーツに分割されて1つにならないままで止まってしまった。この後、学年の仲間の気持ちを一つにまとめるという大切な仕事、つまり「絆」を卒業式のス

テージに展示する仕事を学年のリーダーとしての学級委員と美術係が担うことになっているのであるが、この取り組みがスタートしてはじめての出来事である。どんなに眺めても作品はバラバラのまま床に並べられている。生徒はいない。卒業式はできるのであるか。完成したものを生徒に見せたい。46期生の「絆」の前で卒業させたい。不安を密かに持ちながら、3年生の学年の教職員集団に声をかけた。1枚の作品として「絆」は貼り合わされ、うやうやしく廊下を運ばれ、ステージに飾られた。

今年も199人の3年生が一人1枚の4つ切り画用紙に、「絆」の1/204のワンピースの絵を描き、協働し制作した。ただ、2019年度は初めて教職員も協働し繋がったという記録と記憶に残る「絆」となった。この卒業制作『絆』は、箕面市立第三中学校での伝統となり、作品は入学式で披露され、1年生の憧れとなっている。美術教育は人間形成、人間関係づくり、コミュニケーション活動の中で大いに役立っている。美術によるコミュニケーションツールで美術を核とした学校づくりを目指したい。多文化共生時代の21世紀においては、このコミュニケーション能力を育むことが極めて重要である。知識を身につけるための教育から、試行・活用・表現力を求める教育へと変化している時代において、子ども達のこれからの成長のために、美術科は大変適した教科である。

2. コミュニケーションを取り入れた美術教育について

「いろいろな価値観や背景を持つ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合

いくつか合意形成・課題解決する能力」をコミュニケーション能力と捉え、その育成について考える。

(図 3)

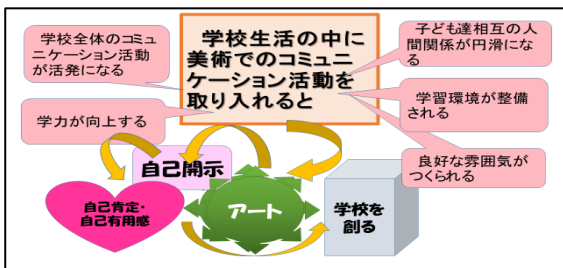


図 3 学校生活の中にコミュニケーション活動を入れると

学校全体の教育課程の中で、中学校美術科教育を中軸とし、学校行事との関連性を重視し、コミュニケーションの活性化を図りたい。また生徒会活動や特別活動、また他教科とも連携し、生徒を育てていく。鑑賞したことを伝える能力を高めることで、コミュニケーションの力は育つと考えられる。「安心できる環境で自分自身を解放し、自己開示できる。お互いのよいところを認め合い、誉め合うことのできる人間関係をつくる」ことを経験しながら、自分自身の人間性を高めていく美術の授業を展開する。この取り組みの中で学級の中の人間関係をつなぎ、学年集団をつくり、最終的な目標として「学校現場の1年生から3年生までの生徒や保護者、そして教職員も一つの絆で結ぼう」というのが、588人の生徒(14クラス 2019年度)を一人で受け持つという厳しい現実の中で考えた一美術科教師の決意である。

そして、兵庫教育大学院での3年間の中で指導をしていただきながら研究し、現場で実践しながら、改めてたくさんの課題があることと共に、研究してきたことを活かすことで生徒達の変容も確認できたのである。導入、制作、鑑賞等のあらゆる場面での様々な形態やシチュエーションを工夫して、意識的にコミュニケーション活動を取り入れてみた。物理的に少なくなった制作時間や、アイデアを練る時間、鑑賞や発表の時間を美術の授業時間とそれ以外(学活、道徳、総合的な学習、文化祭、体育祭、校外学習、卒業式、入学式)に求める工夫と実践を考察する。またその時間や、合科の授業や学校行事の中で、教師間の協働体制をつくり、コミュニケーションすることも、学校生活を活性化させると考える。

コミュニケーション活動の能力を学校教育において育むためには、次の4点が主要になると考える。

- ①自分と異なる他者を認識し、理解すること。
- ②他者を理解することで自分自身をみつめ、思考すること。
- ③集団をつくり、他者と協調したり協働したりする活動を行うこと。
- ④対話やディスカッション等の活動を積極的に取り入れながら課題に取り組み、成果を交流すること。

これらの要素で構成された機会や活動の場を意図的、計画的に設定し、「チーム学校の中で、生活を共にする仲間の一人であることを確認する」という右の図にあるような美術教育を考えてみた。(図 4)

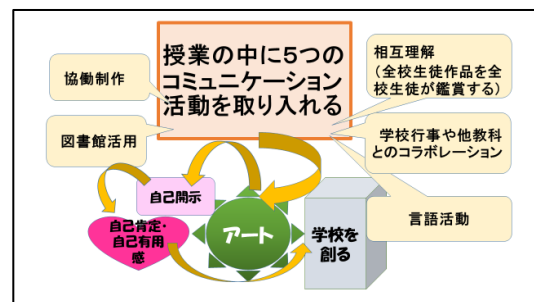


図 4 授業に取り入れた5つのコミュニケーション活動

見ることによって、一緒に生活している仲間をより知ることができるのもコミュニケーション活動の一つ。先輩の作品を鑑賞し、当該学年になったら自分達もこの作品が作れるのだと自覚する。義務教育の中での美術にしかできないことを体験する。誰かと何かを一緒につくる。作品づくりを通して自分の考えや思いをまとめ、多くの人に伝える。色々な考え方、思い、自分が気づけなかったこと、国際的な文化の違いも含めて友だちの作品を鑑賞することで、他人を知り、又、自分自身が広がっていくことを認識する。これが中学校生活の中での美術教育の醍醐味だと考える

3. 授業実践

卒業生の「仲間と協力してつくりあげたこの作品を、とても誇りに思っています。全員で一つの大きな絵を完成させた時、新しい何かが生まれた気がした。一生心に残っていると思います。」という感想が私の座右の銘である。義務教育9年間の総まとめの

中学3年生の1年間は、修学旅行、文化祭、体育祭、卒業式と人生の節目としての行事が続く。その1年間をモデルに、学校生活を創る美術の授業実践をまとめてみた。生徒達に、生のコミュニケーションをし、互いの違いを認め合い、協働することの心地よさと喜びを体験させる。そのような美術の授業を組み立てたいと考えた。美術教室を全校生徒のホームルームにする。「アートでコミュニケーションをする」というプロジェクトは、ここから始まった。

(1) 相互理解

全校生徒の作品を展示して、1年間に4回相互鑑賞を行なう。

①「アート de 自己紹介」で、自分の「美しい」を語る。(図5)



図5 授業開き、自分開きの相互鑑賞

4月最初の美術の授業開きの中で、自分開き、クラス開き、学校開きを行う。4人グループで自分の発見した「美しい」について順番に語る。ポストイットに感想を書き、語り部に返す。3人からの感想をワークシートに貼り、感想を書く。全校生徒のワークシートを三中ギャラリーストリートに展示し、鑑賞する。

②「三中生の三中生による三中生のためのエールの大交換会(絵手紙)」では、全校生徒で行う2つ目の相互鑑賞である。(図6)

共通のタイトルと今年目標を入れた絵手紙を制作し、1学期末懇談の時まで展示する。3年間の



図6 全校生徒によるエールの交換会

我が子の成長を楽しみに足を運ぶ親の姿があり、とても微笑ましい光景が見られる。展示した絵手紙を見ながらコミュニケーションする保



図7 エールの交換会は絵手紙で

護者の姿に、保護者や地域を繋ぐ学校の役割を強く感じる。また、この作品は年度末に返却し、生徒自身が自分の成長を確認しているのに学校生活の1年間の節目を確かめることになる。

③文化祭では、全校生徒の作品を展示し、全校生徒がプレゼンターになる。鑑賞シートを持ち、鑑賞者になり、コメンテーターになる。(図8)

2016 文化祭で、見て感じたこと、考えたこと

(1) 心に残っている作品を紹介してください。
()年()組 名前()さんの『]という作品
(2) どのようなところが心に残っていますか。(5行で具体的に書いてください。)
()年()組()番 名前()



図8 文化祭での相互鑑賞

④「三中生の三中生による三中生のための年賀状コンクール」は、生徒のみならず、保護者や教職員、また地域の方々も楽しみにしている年明けの年中行事になっている。(図9)



図9 全校生徒による年賀状コンクール

全校生徒が制作した年賀状を展示し、お互いの作品を鑑賞しながら全校生徒で投票する。各学年のベスト3は朝礼で表彰される。

(2) 言語活動

①文化祭が終わった後で、各学年各クラスで相互鑑賞の時間を設ける。特設ステージで、文化祭で展示した作品をクラスメイトの前でプレゼンテーションする。(図10) 作品の解説はキャプションを基に行う。鑑賞者は、作品のテーマや調べたことや、テクニック



図10 クラス毎の相互鑑賞大会

や発想、説明の仕方の良かったところをポストイットにまとめ、プレゼンターに返す。クラス全員から褒め言葉をもらうことで、仲良くなり、自己有用感が高まるのが生徒達自身も感じているようだ。3年間続けることで、思いや考えをまとめ、ポイントを決めて分かりやすく聴き手を意識して話す。しっかり聴き取って、短文にまとめるという力が、目に見えてついてきた。「修学旅行で楽しかったことを共有しよう。」という呼びかけに、こだわりが強く、クラスに入りにくかった支援学級在籍生徒が、

周囲の生徒からの質問に答えるという形で参加できた。これがきっかけで、色々な授業に入れるようになっていったという支援学級担任から喜びの報告があった。また、「友だちに褒めてもらったことから、自信ができて、色々なことに挑戦できるようになった。」と高校受験の自己アピール文に記した生徒がいたという報告もあった。何よりも大きな収穫だったのが、生徒が相互鑑賞を楽しみにしていたことである。彼らは、見たくなる！聞きたくなる！話したくなっていたのである。

感想

「みんなのとても温かい言葉がすごくうれしかった。がんばってよかったと思った。」

「自分が一番伝えたかったことがみんなに伝わっていたのだ。良かったというみんなからのコメントを見て分かった。」

「みんなが優しい言葉で、私の作品を見て感想を書いてくれていて、それを見返すと、とてもうれしい気持ちになった。」

「発表して良かった。普段しゃべらない人からメッセージが来るというのがうれしかった。みんなしっかり見てくれているのだと思った。」

(3) 図書館活用

授業の導入、資料の検索、調べ学習、リアルスケッチなどに図書館を活用している。(図11)



図11 図書館活用

箕面市には、中学校区に1つずつの公立図書館が設置されている。小学校出利用指導もしっかりされているので、生徒は上手に図書館を活用している。

図12のグラフから、図書館活用をした授業をして良かったのは、知識が広がった。調べているテーマから違う分野にも興味が広がった。発想力が広が

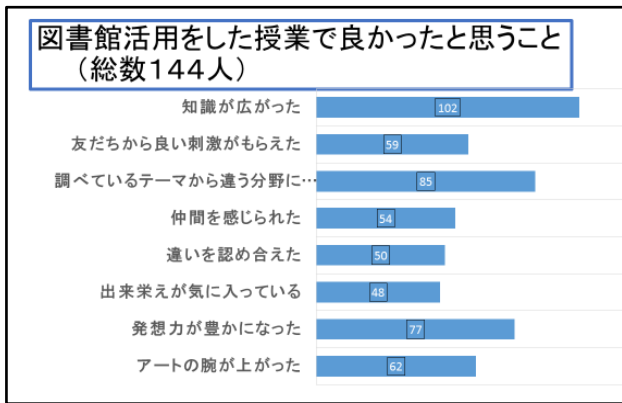


図 12 図書館活用をして良かったこと

った。というのが半数を超えている。教室に資料を借りてきた場合に比べて、図書館に来て利用したときは、興味、関心が多方面に広がっている。図書館の中で行う授業形態のメリットが顕著である。

(4) 学校行事や他教科とのコラボレーション

①マイアニバーサリー「三中に季節の風を吹き込む」(図 13)



図 13 マイアニバーサリー

自分の生まれた季節や月を8つ切りの画用紙の中に表現する。ねらいとしては、図書館で自分の生まれた月や季節を表す出来事や祭り、植物、誕生石、食べ物や月の名前の表し方(日本の昔の月の名前や外国語での表記の仕方)を調べ作品の中に取り入れる。国語の授業で短歌をつくり、作品の一部として表現する。美術科では、季節感を表す色画用紙を選び、モダンテクニックの表現技法を使い季節感をコ

ラージュする。作品は自分の生まれた月の1か月間、三中ギャラリーストリートに展示され、学校の中に季節感を取り入れる。

②沖縄修学旅行での平和学習の取り組み(図 14)



図 14 1850羽の折り鶴でつくった平和のメッセージボード

平和のメッセージボードは学級委員会の呼びかけで、公募した原画を基に、表には1850羽の折り鶴が貼られている。裏側には3年生全員の「私の平和宣言」が貼られている。平和登校日に、学級委員会が修学旅行の報告会で、スライドの前で感想文を朗読した。ここでも3年生の協働制作「平和のメッセージボード」が、1、2年生に披露される。

③オキナワガイド(図 15)

つけたい力は、次の5項目である。

- (a) オキナワに行く前に総合的な学習等で学んだことを、現地で取材する。
- (b) 図書館の資料を活用する。



図 15 オキナワを詰め込む

- (c) 情報教室で描画機能を利用しタイトルをつくる。
- (d) 「オキナワで考えた平和」についてと、「沖縄これ一番」についての要点を絵や文章に簡潔にまとめて、文化祭でプレゼンテーションする。
- (e) 作品をクラスメイトの前で 分かりやすくまとめ、プレゼンテーションする。(図 16)



図 16 オキナワガイド

- (f) 友だちの作品を鑑賞し、良いところを文で評価しポストイットに記入する。ポストイットを全員が発表者に返すことで、感想を交流する。(図 17)

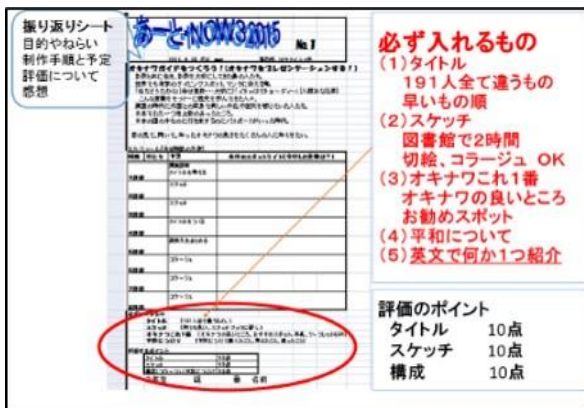


図 17 振り返りシート

④ 「世界の中心で 15 歳のメッセージを叫ぶ」。

体育祭で愛、平和、自由、青春、平等、自然というテーマでデザインを考える。(図 18)

沖縄の紅型染を学習し、シルクスクリーンでTシャツにプリントをした。バックプリントは、クラスで投票をして決めたお揃いのクラスマークをクラスカラーで入れた。一人ではできない協働制作である。ビッグな学校行事の修学旅行と体育祭とがリンクした「オキナワ」をテーマにした作品づくりの集大成である。これを着て、男女仲良くフォークダンスをする。担任にTシャツをプレゼントするという



図 18 15歳のメッセージTシャツ

プロジェクトチームが結成された。メンバーは原作者、学級委員、美術係から形成された。涙した担任がいたという生徒情報があった。ここでも美術によって、学級または学年の集団が育っていることが確認された。

(5) 協働制作 (図 19)

①3年間の思い出を詰め込んだ協働制作「絆」は、「15歳の自分を15cm×15cmの中に刻む」という点描作品を美術科が構成したものである。この点描画は赤い画用紙に3年生全員のものを貼り、生徒昇降口にハート形に展示する。ガラス窓の向こうには阪急電車を通る。卒業生が車内からこの赤い心の「もう一つの絆」を眺めて、「慣れない高校の環境の中にいて、この作品から三中の仲間を思い出し、心が癒されている。」という話を聞かせてくれた。10mの協働制作「絆」の方は、卒業式の前日に、学級委員と美術係3年生の教職員集団の手で、卒業式のステージに飾られる。1か月後の入学式の日、彼らの思いは、入れ替わりに入学してきた1年生に、三中の伝統や

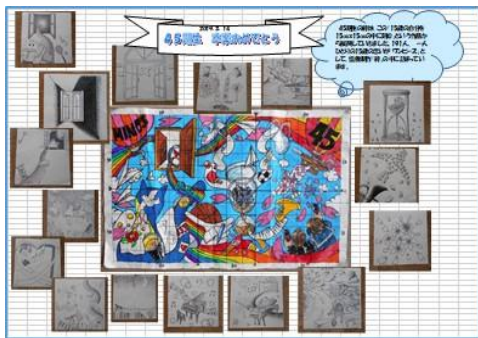
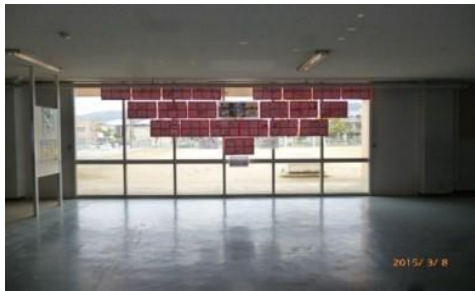


図 19 もう一つの「絆」

文化として伝えられてきた。

3月の卒業式から4月の新入生を迎える入学式へと三中生を繋いでいく。(図 20)



図 20 卒業式から入学式へ 三中生を繋ぐ

4. まとめ

2017年の三年生の感想をグラフにまとめてみた。(図 21) (毎年最後の授業で、三年間の美術の授業を振り返るが、2020年度は突然の休校で、5クラス中2クラスのための最後の授業となったので、感想は2クラスのものから抜粋したものである。)

協働制作の「絆」が「仲間を感じられた」のトップに上がっている。

「3年間の美術の授業を振り返って」というアンケートを実施した。アンケートでは3年間で制作した作品についての感想を記述させた。

「①アートの腕が上がった。 ②発想力が豊かになった。 ③出来栄えが気に入っている。 ④違いを認め合えた。 ⑤仲間を感じられた。」の5つの項目で、それぞれの活動を振り返らせた。

協働制作に45期生の思いをまとめてみると、30%の生徒が「アートの腕が上がった」と思い、40%が「出来栄えが気に入った」そして、70%が「仲間を感じていた」ということが考察される。卒業を目前にした美術による学校づくりの役割の重要性を再確認させられた結果であり、前進する力を得たように思う。

感想より

「仲間と協力してつくりあげたこの作品を、とても誇りに思っています。全員で一つの大きな絵を完成させたとき、新しいなにかが生まれた気がした。一生心に残っていると思います。」

「最初はこんな終わらないのではないかと思います」

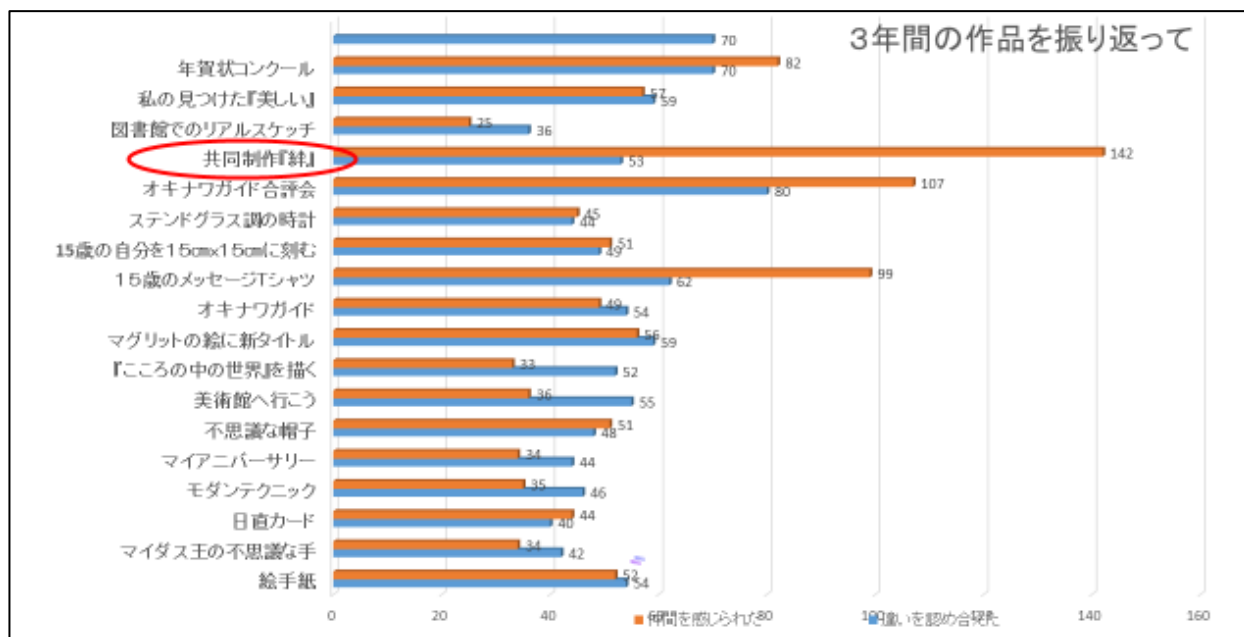


図 21 3年間の作品を振り返って、仲間を感じられたのは

ましたが、みんなで協力して、1つの作品をこんなにも短い時間の中で、仕上げる事ができたので驚きと感動を感じています。今まであまり話せなかった人ともたくさん話せてとても良かったです。最後にこのクラスで良かったと思うことができました。」

「仲間と協力することの大切さを学び、一緒に制作する楽しさを感じる事ができた。2年間とても楽しく充実した授業だった。(転入生)」

「協働制作はその名の通り、クラスと学年の絆を感じられた。」

「アートによるコミュニケーション活動を介して学校を創る」ことを念頭に、意識的に美術科教育の中に、相互理解、言語活動、図書館活用、学校行事や他教科とのコラボレーション、協働制作の5つのコミュニケーション活動を取り入れる実践を行ない考察してみた。これらの活動が活発になると、自己開示が楽しくなり、自己肯定感や自己有用感が高まっていくのが顕著になり、それらが共有され、繰り返されることによって学校全体が、学習協働体として成熟していった。全校生徒の作品を展示することの重要性を改めて痛感する。廊下に展示している作品が学校を創っていたのである。このギャラリーストリートが生徒達の心を癒し、優しさや思いやりを感じ、仲間とつながることの安心感や、うれしさを享受する。先輩がいて後輩がいて、自分とその仲間がいる。その人達の創造した作品が、常に廊下に展示してあるという事実から、学校を創る仲間の

良さや、素晴らしさを感じて、誇りに思っているのである。

懇談時に保護者に作品を見てもらうことからのスタートであったが、常に仲間の作品が身近にあることの豊かさと安心感、自分が所属している集団の心地よさが、学校全体を創生し、熟成していると考えられるようになった。たださえ少ない制作時間が削られると敬遠していた相互鑑賞も授業の中に取り入れてみると、生徒達の創作意欲が高まってきたのを感じる。見られるというプレッシャーではなく、見て欲しくなっている。彼らは、着実に作品を鑑賞する力を身につけ、自尊感情も高めていた。図書館活用で知識を獲得する方法を身につけ、感じたことを表現したくなっていた。仲間と共に作品をつくることを楽しみながら、学習協働体の学校の中で、確かなコミュニケーション活動の力を見つけていたのだ。学習することのベースを身につけ、学習した結果を表現することを担う教科。感性と情操を育て、生きていく中に豊かさを生み出す人生をサポートしていくことができる教科が美術であると考えられる。(図22は2020年3月13日の開式前に、卒業式会場に展示されている「絆」)



図22 卒業式の開始を待つ46期生の「絆」